

新体制発足の第14回総・大会に140人の市民が集う！

橋本新会長のもと、17年目の再スタート！

新会長への就任に当たって

橋本 博文



このたび、はからずも会長の任をお引き受けすることになりました橋本です。甘粕前会長のあまりにも急なご逝去に心の準備ができておりませんが、僭越ながら微力を尽くしてまいりたいと存じます。皆様からの変わらぬご協力を、切にお願い申し上げます。

さて、本号も51号を数えることになり、新たな節目を迎えることになりました。思えば、本会文新協が結成された1996（平成8）年は上越市裏山遺跡の弥生高地性環濠集落の保存運動が巻き起こった年でもあります。わたしが勤める新潟大学旭町学術資料展示館（通称：あさひまち展示館）には、その裏山遺跡の模型が展示されています。製作者は、わたしの教え子であり、本会の最年少会員でもある長野県在住・在勤の小池勝典君です。彼は、この遺跡の現地に立ったことはありません。なぜなら、彼が考古学を志した時点では既に当遺跡は上信越自動車道の建設のため破壊されていたからです。大学の授業の中で取り上げられ、その重要性に気付いた小池君は考古学研究部の学園祭用にと模型の製作を思い立ちました。その際、部活の顧問をしていた自分が少しばかりお手伝いをしましたが、学園祭が終わったあとで、この模型の意義を伝えるべく、あさひまち展示館に引き取って展示させていただいているものです。先日も、日本文化起源論の授業の一環で、展示館を見学した折、この模型の製作の経緯を熱く語ってしまいました。それまで、漫然と見学していた学生が目が、その時光り輝いたのがわかりました。文化財というのは、このように次代に伝えていくべきものなのだなど、しみじみ思いました。模型の脇の写真パネルには、裏山遺跡の環濠を熱心に視察する故・甘粕前会長の姿がありました。

次いで、わたしは甘粕前会長の新潟での文化財保護運動の足跡を語りました。裏山遺跡の破壊後、その運動を総括し、『越後裏山遺跡と倭国大乱』の本となりました。甘粕先生は、よく老若を束ねられ、その運動を発展させていきました。前述したように文新協の活動も、その延長線上にあるわけです。その後、上越市では平地の弥生環濠集落であり玉作遺跡である吹上遺跡が、国道のバイパス工事の際に破壊されようとしていました。しかし、その重要性を訴えた結果、トンネル工法は採用されなかったものの、橋脚で跨いで高架にして遺跡の保護が図られました。後に同遺跡は国史跡になっています。続いて、下越の神林村（現村上市）で、裏山遺跡と同様な日本海沿岸東北自動車道の高速道路建設に伴い、日本列島北限の弥生高地性環濠集落、山元遺跡が発見されました。この遺跡も裏山遺跡と同じくオープンカットで壊される運命にありました。しかし、裏山遺跡の轍を踏むことなく、保存されることになり、裏山遺跡で提唱されたトンネル工法が導入されました。これまた国史跡の指定を受けました。さらに、最近では先の上越市で北陸新幹線の新駅建設に伴って低地の弥生終末期環濠集落、釜蓋遺跡が姿を現しました。こちらも国史跡となり、今後の調査・整備・活用が期待されることとなっています。いずれも、裏山遺跡の保存運動があったればこそ、です。

このように、本会の活動も「裏山遺跡」の原点に立ち返って、甘粕前会長の志を継承し発展させていきたいものです。

新潟の古墳文化研究の新たな展開に興味津々

大法目の報告・講演に140名の市民が集う！



小林 隆幸

去る2012年12月22日(土)、新潟市歴史博物館(みなとびあ)にて本会の第14回総・大会を開催いたしました。橋本新会長を選出した総会終了後、一般参加者を交えての大会が行われました。今年度のテーマは「今こそ、新潟の古墳文化を見直そう！」です。2012年は新潟市の古津八幡山古墳や胎内市城の山古墳の発掘で新潟県の考古学が多いに沸きました。文新協もこの2つの古墳の調査成果に着目し、新潟県内の古墳の状況をあらためて見直してみることを試みました。

講師は3名で、古津八幡山古墳の発掘調査に携わった相田泰臣さん(新潟市文化財センター)、城の山古墳の発掘を担当された水澤幸一さん(胎内市教育委員会)、そして文新協の新会長で新潟大学人文学部教授の橋本博文さんです。相田さんには「新潟市古津八幡山古墳の調査成果」、水澤さんには「胎内市城の山古墳の調査成果」と題して、それぞれ調査成果を報告していただきました。また橋本さんには2つの古墳の調査成果を踏まえ、「新潟の古墳文化研究最前線」の題で講演をいただきました。

最初の報告となる相田さんからは、八幡山古墳は県内最大の古墳で2段築成の径60mの円墳であることが確定し、古墳の築造法が解明されたことが報告されました。当初、この古墳には方形に突き出た造り出しがあると考えられていました。ところが調査では造り出しの盛土が検出できず、単純な円墳であったことが分かりました。また築造方法については、古墳の基礎として周囲に土手状の盛土をし、中央部には小丘をつくってその上に土を盛って古墳が築かれていたことが分かりました。土手状に盛土を築く工法は西日本の工法で、小丘を築く工法は東日本のことから、東西日本折衷の工法が取り入れられていたとのことです。ここには、在地の有力者であった八幡山古墳の被葬者とヤマト王権との関係が密接になり、他地域からの技術者の派遣などの協力関係をつくることができたためではないかとする指摘もあるとのことです。また古墳の盛土の7割は南西側にめぐる周濠を掘った土が利用され、残りは周囲を整地した際の土を利用したようです。

残念ながら古墳の中央に棺を埋葬する主体部は確認されませんでした。古墳の上部が後世に削平されたために無くなってしまった可能性が高いとのことです。なお、古墳築造時期は決め手となる土器が出土しなかったことから判断が難しいようです。相田さんは同じような工法で造られた古墳を参考に古墳時代前期末から中期初頭と推定されているようです。



続く水澤さんは、主体部の調査を中心に棺の検出状況や豊富な副葬品を写真で紹介されました。

棺はベンガラによって赤く塗られた舟形木棺と想定され、内部は仕切り板で3つの空間に区切られていたようです。その中央に一人が埋葬され、頭部があったと思われる付近の土は水銀朱によって赤く染まっていました。そこから勾玉や管玉、ガラス小玉が検出され、肩付近から鏡が出土しています。鏡は布に包まれていたとのことです。遺体右側の頭部から胴部付近にかけては、槍(または剣)と太刀が縦に並んでいました。また、歯と思われる骨片も見つかっており、性別や年齢が明らかになることも期待

されるとのことです。さらに足元には弓と銅鏃が付いた矢のセットが置かれ、弓の両側に付ける鉄製の飾り金具も残っていたとのこと。遺体の置かれていたスペースと仕切り板を挟んだ西側からは革製の鞆（ゆき）が検出されました。これは全国的にも事例の少ないもので、革で地を作って糸で編み込みさらに刺繍をして漆をかけるという手の込んだ造りがされていたようです。このほかにも刀子や斧、鉈などの鉄製品も見つかっており、こうした副葬品は、玉類を除いて列島最北の出土とのこと。



胎内市城の山古墳 (2012年9月8日)

今回の報告は主体部と副葬品の話題に限定されていましたが、最後に城の山古墳が1基単独で存在していることに触れ、実はかつて近くには籠ホロキ山古墳があり、他にも古墳が存在した可能性があつて代々古墳が築かれていたとする興味深い話で締めくくられました。

最後の橋本さんの講演では、前半に古墳時代前期を中心に県内の古墳研究の動向について、後半では先の報告のあつた2つの古墳の評価に話題が移りました。

まず近年の前期古墳研究の動きとしては、県内のこれまで前期古墳が存在しないと思われていたところで古墳が確認されるようになってきたことを話題にされました。阿賀北で城の山古墳が発見されたこと、前期古墳が判然としなかった上越地域でも妙高市の観音平古墳群で前期にさかのぼりそうな前方後円墳または造出付円墳が確認されたことなどです。特に妙高市の観音平4号墳は、後円部に対する前方部の長さが半分、後円部が楕円形である特徴が、奈良県の箸墓古墳に先行する纏向型前方後円墳と共通することから、県内最古の古墳の可能性もあるとのこと。また、県内で出土した鏡にも触れ、なかでも菖蒲塚古墳出土の甕龍鏡については全国の甕龍鏡を出土した古墳の状況から、ヤマト政権が西と東の要となる首長に配っているような出土状況だと説明されていました。

話は研究面にも及び、越後の北辺地域に前期古墳の円墳が点在しているという重要な特色から、これまで古墳研究は前方後円墳が主流であったが、円墳の研究は避けては通れない課題であると話されました。これは早くから故甘粕健先生が注目されてきたことで、橋本さんも甘粕先生が発表された論文を紹介されていました。

そして後半の話題は八幡山古墳と城の山古墳の調査成果の評価と課題に移ります。

まず八幡山古墳の評価として、円墳として確定されたこと、規模が直径60mであることが分かったこと、西日本東日本の折衷様式の工法による墳丘構築法が分かったこと、上部が削られ埋葬施設や副葬品は無かったことなどを挙げられました。課題は築造時期を絞り込むことで、そのためにも今後の調査で土器の発見に期待したとのこと。ほかに注目している点としては、畿内の古墳では一般的な葺石と埴輪が無いことも挙げられ、地域最大でありながらこれらを持たないことは特筆すべき問題としています。これをどう考えるかが課題のようです。

城の山古墳については、埋葬施設が明らかになり副葬品の全貌が分かったこと、また葬送儀礼の工程が細かくとらえることができたことなどを大きな成果としています。そして副葬品の量、質、組み合わせなどは、1つのモデルケースになるのではないかとのことでした。

課題としては、城の山古墳に見られる楕円形墳形の全国例の調査、段築の有無の問題、舟形木棺の系譜と前期古墳に一般的な割竹形木棺との関係、八幡山古墳同様に葺石や埴輪が無い問題、鑄造品である銅鏃と同型品の有無の調査などが挙げられました。さらに、副葬品配置の検討からヤマト政権や他の地域との関連も分かってくるのではないかと期待もあるとのこと、今後研究を進めるうえでも、保存処理をしっかりとすることが必要とのことでした。

今回の大会はホットな話題の企画ただだけに、受講者は定員をはるかに超える約140名に及びました。古墳の調査が進むにつれ、今後新潟の古墳文化がどのように明らかになっていくのか楽しみです。

県内の催し物情報

県博の企画展「古代の越後国古志郡 - 八幡林遺跡出土木簡とその時代 - 」

木村 英祐

去る1月19日(土)、長岡市の新潟県立歴史博物館で行われた「越後国域確定1300年リレー講演会」第9回講演会に参加してきました。和銅5(712)年にそれまで越後国の北方に「イデハった地域」であった越後国出羽郡が「出羽国」として分立し、今の新潟県の県域が確定してから1300年にあたる節目の2012年度、新潟県教育委員会が主催したりレー講座の最終回です。

この日の講演は秋田大学教育文化学部教授の渡部育子さんによる「出羽国と越後」です。古代の地方行政機構や東北史を研究してきた渡部さんは、律令国家の東北経営における越後国の役割の重要性を訴えてきました。今回の講演でも、7世紀において「コシの北辺」にあり阿倍比羅夫の遠征のように北征の前線基地となった淳足柵や、701年の大宝律令の制定にともなって「辺境国」と位置づけられて北方に拡大していった越後国の重要性はもちろんのこと、出羽国の成立後も「越後の城柵は国防上、不可欠のものだった」と指摘しました。さらに、「古代国家の謎を解く鍵は越後にある」と述べ、越後国研究の可能性に言及し、今後の研究の進展にエールを送りました。

もうひとつの講演は、田中靖さん(長岡市立科学博物館)による「長岡市の古代遺跡」。有名な八幡林遺跡をはじめとする旧和島村の官衙関連遺跡の調査に携わってきた経験を踏まえ、下ノ西遺跡・門新遺跡を含む八幡林遺跡群や、最近の川東遺跡・浦反甫東遺跡の調査成果をまとめました。

さて、県立博物館では平成24年度冬季企画展「古代の越後国古志郡」を開催中(3月10日まで)です。これは古代の古志郡(現在の長岡市域周辺)の遺跡から出土した貴重な遺物の数々を集めたものですが、旧和島村の古代遺跡から出土した木簡や墨書土器などの出土文字資料が並ぶ様子は圧巻です。衝撃的な発見となった八幡林遺跡の「沼垂城」木簡をはじめとする、日本の古代史研究を揺るがせた遺物の数々をまとめてみるができる、まことにぜいたくな企画展です。

展示コーナーの一角には駿河国敷智郡の役所とされる浜松市伊場遺跡の木簡も展示されていました。この遺跡は東海道本線高架化用地として発掘調査が行われてその重要性が明らかになり、全国的な保存運動にもかかわらず静岡県教育委員会が県史跡指定を解除、「指定解除取り消し」を求める裁判にまで発展した、日本の文化財保存運動史上に残る遺跡です。その遺跡について記した『歴史保存と伊場遺跡』(椎名慎太郎・遠江考古学研究会)という本の表紙には「わたくしたちの歴史は、誰にでも理解される正しい姿で、次代の人々に引き継がなければならない。」と記されています。私が学生時代に感銘を受けた言葉です。

八幡林遺跡は、幸い新潟県民の運動の力で破壊を免れましたが、現状はトンネル工法によって「保存」され、今後の「整備と活用」を待っている状態です。今回展示されている貴重な遺物の数々も、常設展示される施設は、残念ながら現在のところありません。博物館の担当者も「これだけの遺物が並ぶ機会はなかなか無い」と語っていました。八幡林遺跡群の整備と活用の気運を盛り上げるためにも、たくさんの方に見ていただきたいものです。みなさん、ぜひこの機会をお見逃しなく!

編集後記

昨年12月22日(土)、本会第14回総・大会を開催いたしました。総会では、甘粕健前会長亡き後の新会長に橋本博文さんを、そして橋本さんにかわる副会長に川上真紀子さんを選出しました。続く大会には事務局の予想をはるかに上回る約140名もの参加者にお出でいただき、ありがとうございました。最近会場として使用させていただいているみなとびあのセミナー室は足の踏み場もない状態、そして資料が足りなくなるなど、期待して駆けつけていただいたみなさんには大変ご迷惑をおかけいたしました。この場を借りてお詫び申し上げます。

この『会報』は文全協会員でなくても、文新協行事に参加された方には、可能な限りお送りしています(ご参加なき場合は郵送を取りやめる場合があります)。名簿は本会からの連絡にのみ使用し、個人情報保護に留意し厳正に管理しています。会報送付がご迷惑な方は、事務局までご一報下さい。

文化財保存新潟県協議会事務局(入会についてのお問い合わせも)

E-mail: bun-sin-kyou@js8.so-net.ne.jp